

(環境)甲山中学校 1年

## 『知ることからはじめる環境コミュニケーション ～今、環境のためにできること～』

4月～12月(30時間)

### 1 ねらい

今年10月に名古屋市で「生物の多様性に関する条約締約国会議(COP10)」が開催された。ニュースや新聞などのメディアにも多く取り上げられ、この会議をきっかけに、生徒の中にも今まであまり耳にしたことのない「生物多様性」ということばをよく聞くようになり、関心を抱いている生徒もいる。

地球上で生活している我々にとって、その地球の環境を脅かしたり、ともに生存する他の生物が絶滅の危機に追い込んだりする環境問題は最も重要な課題であるはずである。生徒たちも小学校、中学校においてさまざまな場面で世界や日本の環境について学習し、現状を知ったり、課題を認識したりする。しかし、教科書に書いてある内容だけを学習しても表面的な学習しか行うことができない。「地球温暖化」「オゾン層破壊」「酸性雨」など単語を知っているだけであるために、環境問題に対しての切実感を得ることができない。そのために、自分の身近にある環境問題に気づくことができなかつたり、自ら環境のことを考えて行動することができなかつたりすると考える。

そこで、「身近にある環境問題について認識し、興味・関心を抱くことができる」「自分から環境のことを考えて行動することができる」ために、研究テーマを『一知ることからはじめる環境コミュニケーション～今、環境のためにできること～』とし、活動を展開した。体験学習や本校の行事、各教科の授業など様々な学習の場面から生徒一人一人に身近な環境について意識をさせたい。中学校3年間の学習を通して、確かな力を身につけ、未来を創造していくことのできる人間になってもらいたい。

### 2 実践の概要

6月に2泊3日で富士自然教室に出かけた。富士自然教室では、毎年、普段学校では行うことのできない貴重な体験活動を取り入れている。今年度はその活動の中に環境学習を取り入れて実施をした。

富士山周辺にはたくさんの洞窟があり、その洞窟にはコウモリが住んでいる。実際に洞窟を訪れ、コウモリたちの住み家を観察し、地元のネイチャーガイドから話を聞いた。<資料1>

#### 資料:1 コウモリ穴の探検



富士山周辺は広大な規模の樹海で覆われている。富士山から流出した溶岩が冷えて固まった上に、コケが繁殖し、長い年月をかけてこの樹海を構成している。しかし、この樹海も廃棄物の投棄などにより、破壊が進んでおり、そこにすむ生物たちの生存に大きく影響が出ている。実際に、樹海を散策し、自分たちの目で樹海の様子を見ることで、樹海の神秘さに触れたり、自然環境を守ろうとする意識を高めたりすることができると思った。樹海散策を通して自然の大切さを改めて感じることもできた。また、夜の樹海を散策し、森のにおいや空気を肌で体感し、自然に対する興味や関心を高めることにつながった。

富士山のふもとにある朝霧高原には東海自然歩道といわれる散策道がある。その散策道にブルーベリーの苗木を植えた。<資料2>小さなことではあるが、緑化活動に携わることで、環境のために自分たちがはたらきかけることができたという実感をもったり、自然に対しての関心を高めたりすることができた。

#### 資料:2 植樹活動



富士自然教室最終日に富士山4合目から5合目付近までの登山を行った。富士山を遠くから見た経験のある生徒は多くいるが、実際に登

山をしたことのある生徒はあまりいなかった。遠くから見た富士山のイメージとは違い、溶岩が冷え固まってできたごつごつした大地を生徒たちは歩いた。＜資料3＞5合目に到着し、5合目付近の清掃活動を行った。＜資料4・5＞レストハウスの駐車場や登山道の脇にはたくさんのゴミが放置されており、1時間程度の活動時間でたくさんのゴミが回収された。生徒たちは日本一の富士山に捨てられたゴミの量に驚きを覚えた。また、自分たちが行った清掃活動の意義を感じることもできた。

資料:3 富士登山の様子



資料:4 清掃活動の様子



資料:5 回収されたゴミ

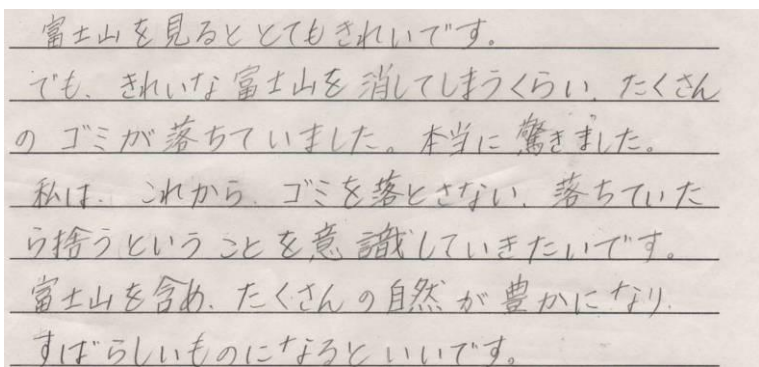


富士自然教室を終えて、これからの自分の生活の中でも「ゴミを落とさない」「落ちていたら拾う」という意識を高めることにつながった。＜資料6＞これらの活動は東海愛知新聞に取り上げられた。＜資料7＞自分たちの活動が新聞に掲載されたことで、自分たちの活動への意義を改めて感じる事ができた。

資料:6 活動が紹介された新聞



資料:7 生徒のワークシートより



### 3 実践を振り返って

我々人類は、食べ物や住む家から気候まで、生き物と生き物が創りあげている環境に生かされている。自然の恵みで活かされているのである。しかし、普段の生活の中で生き物を採って食べるという機会がほとんどないため、生かされているという実感が沸かない。ただ、「生き物の数が減った」「絶滅の恐れがある」という情報を耳にすると、私たちは不安を感じる。ある生き物の生きられる環境がなくなったことが、いずれ私たち人類に降りかかってくるかもしれないという気持ちがそうさせるのだろう。このような不安を感じなくなった時、私たち人類が「生き物」であるという意識が薄れ、「生き物」として生存していくことが困難になるのではないだろうか。私たちと生き物とのつながり、生き物同士のつながりを見つけて、知って、感じて私たちもその一つであることを記憶し続けることが今、大切なことではないかと思う。